
時、出ずる間に

甘辛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時、出ずる間に

【Nコード】

N0339B

【作者名】

甘辛

【あらすじ】

傲慢で傲慢で俺様で目茶苦茶で謎まみれな奴が、人生の記憶が全部飛んじやった歴1年の僕の元に降臨した。何でもそいつは、人の記憶やら時を司る「肅正人」なるモノらしい。なんやかんやで僕は、そいつと協力する事を余儀なくされてしまったようだ…。噛み合わない二人組のファンタジーなライトノベル！

secondo プロローグ

「例えば、例えばの話だ」

奴はおもむろにそう言つと、何の躊躇もなく何のためらいもなく何の前触れもなく何の恐れもなく、僕に向かい口を開いた。「仮に、俺様がお前を殺したとしよう。その時――

お前の、俺様との記憶は自我を持つか？俺様を……殺すか？」

答えられる訳がない質問をするのが、奴の悪い癖だ。

でも。

あるいは。

僕はこの問題に、

いともたやすく簡単に迷う事無く答えられた、

……かもしれない。

「……………」

違うな。全く違う。

僕はきつと、選ぶのが怖いんだ。

選んでその上で、奴が僕をどうするか――

恐れている。

「……………」

奴は、何も言わない。

何も言わず、じつと僕を、その澄んだ金の瞳で見つめていた。まるで。

そう、僕を地獄の底に、はたまた深い闇の奥に、

――墜とす様に。

second 1、出会い

人は弱い。

だからこそ、自分を失う。

僕はこの方1年程、記憶が無い身だ。原因は事故らしい。

無くした当時は身分証明書は持っていなかったので自分の名前は知らないし、歳も分からない、住所もちろん覚えていない。

なので人には年齢を聞かれるととりあえず1歳と言っておくのだ。

住所は、現住所。

名前。

名前は。

…、

「僕」

で良いだろう。

僕は行く当ても無く、記憶を失う前に持っていたらしい財布の中の金を元手に、安いアパートを借りて慎ましく生活している。

住人はみんな優しいし、たまにお裾分けなんかも貰えるから不自由は何一つない。

毎日が平穏。

毎日が平和。

それで良かった。

自分の記憶を探ろうなど、考えたこともなかった。

これからも、平穏な日々しか続かないと。

…思っていた。

思ってはいた。

でも。

突然。

それは本当に突然で。

奴は、

勉強机の引出しの中からでもなければ、
おかしなランプの中からでもなく。

出現したのだ。

途方も無く遠く、

気が遠くなる程現実離れた、

「そこ」

から。

それは、暗黒と称するに相応し過ぎる程の闇夜。もう何時間、外を
歩いただろう。

もう何時間、上を見上げているだろう。
退屈だ。

バイトの日以外はずっとこうしている。何せ、やることが無いのだ。
ファーストフード店のバイトなんてあまり良いことはない。強いて
言えばポテトとバーガーで食費が浮く、という事くらいだ。

…そろそろ、まともな会社に就くべきだろうか…。

こうして夜道を散歩する事は僕の趣味の一つだ。こうしていると「自分」

という存在が濃くなる気がする。

完璧なる孤独。

完全なる静寂。

その中でだけ、僕は

「自分」

を感じられる…。

「ふう…」

そろそろ家に帰るか…。こうしているとキリがない。

僕はいつものコースをゆつくりと、歩く。まるで、そう、永久に辿り着かなくて良いという様に。

いつもの公園に差し掛かり、西側の出口から出ようとすると。

人が、居た。

僕が先程まで眺めていた空に、
浮遊して。

「……………」！

僕は、自分がこれから死ぬのだと悟った。
何せ、その

「人」

は。

骨しか残っていなかった。

骨だけの腕で巨大な鎌を持ち、僕の目の前で浮遊するそいつは。

紛れも無い、絵に描いた様な死神。

「あ……………」

声が出ない。

あまりにも現実からぶっ飛んでいるその目の前の光景は、

恐怖というよりも、

畏怖というよりも。

美、だ。

僕は死ぬ事は怖くない。記憶が無いのに、他に何が残っているというのだろう。

しかしそれはもう…

言葉に喻えられもしない、夜をさらに深めた様な美しさだ。

second 2 肅正人

僕は。

僕はその光景に、尻餅を着いた。気圧されて、重力への抵抗が困難になったのだ。

死神は僕に気が付いたのだろう、こちらを向いた。

よく見ると顔は人間とそう変わりはない。その顔にはおかしい刺青をしていて、右頬にシャープ、左頬にフラットの記号が彫つてある。髪はとても奇妙で、左側がぼさぼさで黒く長髪、右側は整つた、金色の短い髪だ。骨だけの部分も左の腕と脚だったことに気付いた。そう、そいつは真ん中で分けて、右側と左側が全く別なのだ。

死神は浮いたままでこちらに向かって来て、僕の前に着地する。

…殺される…

恐怖は無くても痛みはあるだろうと悟り、身体は自然に強張つていた。目がしっかりと閉じられ、歯を食いしばる。僕には走馬灯を作れる程の思い出は無いので、このまま楽に逝けるだろうと思つた。

が。

「…お前…」

死神はその手に持つ鎌で僕の身体を八つ裂きにするかと思いきや、語りかけてきた。

「…もしかして、もしかしくなくても、俺様が見えたりする訳？」

…？

何を言っているのか理解出来なかった。

お迎えじゃないのか？

僕は瞑っていた目をそっと開き、そいつを見た。

すると、状況を確認する暇も無く僕は言葉を失った。

鎌が。

死神の巨大な鎌が、僕の首にぴたりとくっつけられている。

「……！」

「ウンとかスンとか言えよ。見えてんだろ？」

…、

スン。

…いや、それはさすがにやめておこう。本気で首の危機だ。

「……誰、だ…」

緊張も最高潮に達し、うわずった声をやっとの事で絞り出した。

「…あ？

なんで俺様が先に自己紹介なんざしなきゃいかねーんだよ。自分からしろ自分から」

「…」

こいつ…。

「…僕は、僕だ」

「は？」

「だから、名前」

反応は人間と同じようなもんだった。こいつ馬鹿にしてるのか？とでも言いたげだ。

「…なんだかわからんが」

死神は続ける。

「そんなに構えなくても俺様は別にお前を殺しに来たわけじゃねえ…」

少なくとも鎌を僕の首に当てている奴の言い草じゃないな…

「俺様はアシエルという。どうせお前は俺様の事を死神とも思ってるんだろっが」

ぎく。

「違うぜ。俺様はな、

肅正人ってんだ」

…肅正人…？

いや、聞き覚えはないな…。

僕は黙って、屍餅をついたままの体制で死神…

もとい、肅正人アシエルを見上げた。

それ以前に、僕は何故こんな理解不能な物体と対話できているのだから。

「肅正人ってのは、人間の時や記憶を刈る仕事だ。つつても、もちろんその記憶の所持者が居なくなっただもの…つまり、死んだ人間の記憶だけだな」

「死んだ人間の…記憶」

もしかすると僕は一度、死んだことがあるのかも…。

second 3 初仕事

「死んだ人間の…記憶」

もしかすると僕は一度、死んだことがあるのかもしれない…。

「まあ、純粋で健全な記憶は回収するだけだ。ただ…」

アシエルは一呼吸置く。

「あまりにも強い怨みやら悲しみを持ったまま死んだ記憶は、自我を持ち人を襲う。標的は主に怨みやらの矛先にあたる人物だ」

…なるほど。

…って…

「待て待て。よく分かんないのはこっちもだよ。なんでそんな話を僕に？」

「ばったり出会っただけ（？）の僕に、だ。」

「なんで…って。」

「お前、俺様が見えてんだろ？なら決まってるじゃねえか」

「決まってるじゃないよ。粛正人だかなんだかの定義が人間の僕に―」

「ああそうか忘れてた。いやな、本来人間には見えない筈の粛正人が見える人間は、」

…。

何だ…？

「記憶の器…だってな」

「記憶の…ウツワ？」

器どころか、僕には入れる程の記憶はないぞ。

「さっきも言った通り、俺様達粛正人は記憶を収集・削除する。特に削除ん時、粛正人単品じゃあ追っかけ回さなけりゃいけねえ訳よ」

…まあ自我があるんなら当たり前か。

「で。」

器がいたら、その器に逃げかけの記憶を収めといて、その上で削除

出来るんだ」

…。

…はい？

つまり、それは、何だ？

「…僕に記憶の匣になれと？冗談じゃない！なんで此所を歩いてい
たっただけで僕が巻き込まれなきゃいけないんだ！大体僕はその肅
正人とかって奴だって…」

「うつせえな、俺様だってこんないかにも卑屈野郎が記憶の器だな
んて嫌だっつの。」

いいか、記憶の器に成るものは、記憶を失ってなけりやねえ。

お前もそうの筈だ。もしこのまま器として働いたら、」

奴は今の今まで僕の首にくつつけていた鎌を引っ込めた。どうやら
もう抵抗しないと悟ったらしい。同時に僕も立ち上がると、冷や汗
をかなりかいていた事が服の張り付き具合ではつきりわかる。そし
てアシエルは再び話を続けた。

「働いたら、失われたお前の記憶を呼び戻してやろうじゃねえか」

「！」

記憶。

それは、僕が完璧に諦めていた物。

記憶。

それは、僕が落としてしまったモノ。

でも。

「…要らないよ」

「ああ？何だとー？」

僕は下を向いたままで首を振った。

「記憶なんて要らない。僕は今の生活で充分暮らしていける」

そんな僕を見てアシエルは呆れた顔をし、その後溜め息を吐く。

「…だからさ、卑屈すぎなんだよお前イライラするな。記憶が戻っ
たらもつところ…うーん…ほら…」

思い付かないんだな。

しかし、見た感じこいつは本気で困っているようだ。まさかここまですれて、あの浮遊は現代日本の素晴らしい技術によるワイヤーアクシオンだったなんていうまい。

…記憶が。

僕の、失った時間が。

戻ってくる。

ここは悩むべきなのだろうか。

「おい」

何だかんだで考え込んでいた僕を、アシエルは一声で戻した。

「お前には悩んでる時間もねえ。決心してようがしてまいが早速初仕事に行かなきゃだ」

「そんな…勝手過ぎる！僕にも都合ぐらい…」

「抵抗するなら」

次の瞬間、僕は凍り付いた。心臓が、声が、一瞬動きを止めた。

「強引に連れて行く」

先程は首にくっついてた鎌が、今度はその大振りな刃で僕を真つ二つに出来る位置にある。僕は直感で、こいつの様な類の生き物は卑怯だとかいう言葉を知らないのだと知った。

「…だから、僕も下手したら怨みも無い相手に殺されるようなことは…」

「っ!？」

次の瞬間だった。

僕の足は地を離れ、空を蹴る。風が異様に顔に当たり、重力という物が僕の存在を拒否したような感覚。

飛んでいる。

「言っただろが。初仕事、行くぜ」

奴は僕の服の襟を掴んで飛んでいたのだ。

その状況を理解するのに、10秒。

「うわああああ!？」

自慢ではないが、僕は高い所が苦手だ。恐らく一年前までもそうだったに違いない。

「ちょ、ちよつと!？僕はまだ協力するなんて―」

「うつせえ!俺様が良いつて言っただから良いんだよ!!」
んな無茶な…

僕はもがこうとしたが、もう地面から数10メートル離れていたことを思い出し、やめた。

「ってゆうか、僕はまだあんたの事も肅正人とかいうやつのも全然…っ」

「そのうち分かる!黙ってついて来やがれ!」

もうだめだ…。こいつには人間の理屈は通じないらしい。

…待てよ。

服掴まれてるんなら、いつか服が脱げて落ちるんじゃない。

もう、記憶がなんたら以前に死亡の危機だ!

こうして僕と、肅正人アシエルの奇妙過ぎる生活が始まったのだ…。

って言うか、誰か助けてくれ!

second 4 グローブ

僕が住んでいるのは、情報という情報が交錯する街、東京だ。
しかし。

その東京が、記憶という記憶まで交錯していようとは…。

僕は半分意識を失いかけていたが、アシエルにきつちりと付き合わ
されている。

「あー忘れてた。お前、これ付けとけ」

と渡されたのは、何やら革生地グローブだった。

「これがあれば、人間でも記憶が視えるようになるし、さらにそれ
に触れることも出来るつつう便利な代物だ。無くすんじゃねえぞ、高
えんだからよ」

そもそも僕は、命綱が化学繊維製の服だという恐ろしく奇跡的とも
言える危機的状況を抜け出すため、先程からしっかりとアシエルの
腕に掴まっていたので（もっともその状況を作り出したのは他でも
ないアシエルなのだが）、受け取るだけで一苦労だ。

「…で？これを付けて、僕はどうすれば良いんだよ」

「もち、それで自我のある記憶を掴まえるんだよ。少しは役に立つ
だろ」

…とことん自己中な奴だ…

僕は諦め半分苛々半分それを付ける事にした。

一見だばだばで、割と手の小さい僕にはサイズが合わないように見
えたが、茶色いその生地に指を入れた時、何故かぴったりと張り付
くように手と合わさったのだ。

いや、登場が浮遊シーンだった奴に常識なんて求めても無駄なこと
なのだろう。もちろんそいつにもらった物でも、だ。

しかし。

そんな生温いもので済む程、奴の現実離れは終わっていなかった。
「……!?!」

そのグローブをはめた途端、僕は、
僕の目には。

ありえないコトが、
ありえていたのだ。

「くっ、うあっ、おおっ!?!」

縦横無尽に僕の周りを、何かが。

見えない何かが、

駆け巡っている。

「そいつが記憶だ」

アシエルは飛びながらも下にいる僕の方を向いて話し掛ける。

「一般にその辺に居る奴は割と善良な奴だかな。削除の後に回収するぜ」

回収した善良な記憶を持ったまま邪悪な記憶を削除しに行くと、善良な記憶が取り込まれてしまうらしい。

second 5 タワー

それにしても、ざっと見て何十個は居る。グローブをはめるまでもちろん気付かなかったが、その動きは凄まじく息が止まりそうなくらいだ。

肅正人であるアシエルは、この光景をいつも見ている、そして視ているのか…。

正直全く羨ましくない。

視ていたいなどとは思わないが。

「記憶、か…」

僕とこいつの感性は違うようなので、同情は無用だ。

アシエルはひよっとするとこの光景が嫌いではないのかもしれないし、第一僕を命の危険にさらした奴を、何故心配する必要がある？
…確かに僕って、卑屈だな…

「それから」

僕は気持ちの切り替えとばかりにアシエルに話し掛けた。

「聞き忘れてたけど、今僕らが向かってるのって…どこ？」

「あん？」

奴はすぐ返事を返す。

「んなもん決まってるんだろ。ここをどこだと思ってる？東京じゃねえか。東京と言えば…」

アシエルの指は、先程より目前に迫っていた、その建造物を示した。「東京タワーだろ」

なるほど…

つまり、タワーに邪悪な記憶が停滞しているということか。

…あれ？

「…待った」

僕は身の危険を感じ、恐る恐る聞く。

「もしかして…僕は、削除のときも飛んでなきゃいけないわけ？」

「ったりめえだろ。居るのはタワーの最上階だかな」

その通り！？

「うーか嬉しくねえ！」

「ちよっ…なんでだよ！僕は高い所苦手だっ…」

力いっぱい僕の抵抗を無視しやがったアシエルは、平然とそのまま飛んでいる。

ムカつく。

「くだらねえこと言っつと、もう着くぜ？」

「くだらねえって…」

…！？

心底驚いた。

だって。

僕の想像力は、

こんなモノを考えられるほど、

豊かじゃあない。

それに人間の姿を求めても無駄な事が、すぐ分かる。

スッポンは月になれない。

かといって太陽も月とは程遠い。

化け物だ。

そいつは。

「う…ぐ…あああっつ」

東京タワーに居ると言われたが、これは居る、というレベルじゃない、

憑いていると言っべきだろう。

大き過ぎる…

その顔と思しき部分には、目と鼻の境界なんて皆無だ。どろどろに溶けて、冷やしても固まりそうにない。

手は…どちらかというと触手に近いか。

やはりどろどろだ。

呻き声こそ出ているが、口が見付からない。あるいは、始めから無いのかもしれない。

「こっ…これを、僕の中に入れる…のか？」

…想像しただけで鳥肌が立つ…

second 6 - 手伝い -

「あほか！んなことしたらお前、精神が内部崩壊すつぞ！まずはくっ付いてる張りぼてを引っ剥がして、本体を叩き出す。手伝え！」

手伝え！？
どこをどうしろと！

少なくとも僕が手を出せるようなモンじゃないが…。

「そのグローブは基本的に肅正人の能力を一部コピーすることが出来るんだ。

…面倒くせえから本当はしたくねえんだが…
このさい仕方ねえ！」
と。

そう言い終わるか否か、奴は。

高所恐怖症である僕を、あろうことか。

100mはある上空から。

「落としやがったああああっ！？」

ちよつと待て！

それは！

それだけは！

こんな…こんな死に方だけは…！

「嫌だああああっ！」

落ちる！墜ちる！

地面が近付いて、

僕の身体は血をぶちまけて四方に弾ける！

かと、

思いきや。

「…あ、あれ？」

僕は地面から数cmのところで停止していた。
それもその筈、僕は
飛んでいたのだ。

「うわ！」

そう気付き足をガク、と振るうと、さらに身体は上へと昇った。

「…なんだ、これ…」

周りを見回したがしかし、アシエルのあの骨だけの細い腕はどこにもない。

…何故、飛べるんだ？

「おーい？死んでねえかーっっ？」

と、僕を落としやがった癖に半端に心配している肅正人が上空から叫んだ。

この期に及んで…。

腹が立つので無視し、もう一度僕は周囲を見る。すると、異変に気付いた。

グローブが。

あの謎のグローブが、

光っている。

「…これは…」

なるほど、飛んでいるのは僕ではなくグローブだったのだ。どうりで手に違和感があった筈だ。これもアシエルの計らいなのだろう。

…それにしてもあいつ、一言位言って実行するとかしろよ…

「死んでねえなら早く上がって来やがれー」

奴は丁寧な物の頼み方を知らないらしい。

「上がるっ たってやり方わかんないし…」

僕は、数m上の生意気な肅正人には聞こえていないことをわかっていながら呟いた。

これをどうしろと…

「今、足が地面に着いてると思って蹴ってみろ。お前みてえな下手くそでも出来る筈だ」

…一言多いってのに。

僕は叫びたい気持ちを押さえ、言われた通りにした。
すると。

僕の身体は風に抵抗してすごい速さで浮上し、あっと言つ間にアシエルがすぐそこに…

では無かった。

僕は、アシエルが目の前に来たかと思いきや通り過ぎてしまっていたのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0339b/>

時、出ずる間に

2010年10月15日23時41分発行